

『看護師が行なう 2 型糖尿病患者の療養支援』書評

宮田 哲 (JCHO 大阪病院 内科診療部長、日本糖尿病学会専門医・指導医)

本邦に糖尿病療養指導士という資格を設けようという機運がようやくみられ始めた 2000 年頃、本書の著者から、当時、神戸大学医学部附属病院に勤めていた私に、2 型糖尿病患者の生の声を聴きたいので、外来患者を紹介してもらえないかという依頼をいただいた。

今でこそ、資格を有するメディカルスタッフが、医師と同伴することなく患者とかかわることが普通になってきているが、当時は、医師と患者の 1 対 1 の関係が絶対的であり、栄養指導やインスリン注射手技指導といった医師の指示のもとに行われる行為以外で、メディカルスタッフが介入することほぼ皆無であった。その証拠に、当時、看護師たちはパラメディカルと呼ばれていた。そのような状況だったので、外来診察後にさらに 30 分以上もの時間をいただくことに対して患者からの不満が噴出しなかと危惧したが、それは、全くの杞憂に終わり、それどころか、それ以降の患者の顔つきが変わってくることを実感した。

患者が自己管理行動を行えるように導くことが糖尿病チームの役割だが、著者は、ここで、療養指導という言葉ではなく、療養支援という言葉を用いている。私達は、慣例的に「教育入院」とか「〇〇指導」とかいう用語を使ってきているが、これらは、医療者と患者の間に上下関係を想起してしまう。私達医療者は、つい、専門的知識を提供することに走ってしまいがちだが、それは本質ではないと筆者は述べている。まず、患者を理解するところから始まり、患者が自己管理行動を実践できるように患者自身の持てる力を最大限発揮させるプロセスにかかわることが求められる。時には、患者の葛藤を感じて、それに寄り添うことも必要である。これには、看護師にもそれなりの覚悟が必要である。本書には、その覚悟とそれを克服するスキルが、著者の体験談に基づいて、随所に散りばめられている。

本書は、糖尿病という慢性疾患と共に生きるために自己管理行動を獲得していく患者を支援する立場にいる全ての方々に読んでほしい一冊である。